

【表現学関連分野の研究動向】

英語学

長谷部 陽一郎

2023年に発表された研究を紹介することもさることながら、英語学を含む表現学関連分野に関わる者が向き合うべき事実について触れなくてはならない。それは大規模言語モデル (LLM) を用いた高性能な人工知能 (AI) システム、すなわち ChatGPT やそれに類するツールの出現である。初期の ChatGPT で用いられた言語モデルの構築には約 5,000 億トークンのデータが用いられた。これは書籍でいうと約 500 万冊に相当する (東京大学松尾研究室「LLM 大規模言語モデル講座資料」より)。こうした LLM が発揮する能力には目を見張るものがあり、ChatGPT はユーザーの指示に応じて様々な文章を生成することができる。訓練データの大部分は英語によるものであることから、英語においては形式・内容ともに正確で自然な文章を作り出すことができる。また最新の GPT-4 では日本語を含む多数の言語における性能も大幅に向上した。

2023年には学術や教育はもちろん、商業や行政においても、ChatGPT をいかに活用するかという話題が取り上げられ、多くの議論と新たな試みを生んだ。これが意味するのは、他でもない、「AIによって生成された『表現』が日常の至るところに入り込んだ社会の誕生」である。すでに企業の広告に、学校の教材に、小説やコミックに、AIによる文章が(また画像、音声、映像が)用いられ始めている。私たち人間と異なり、AIには現実世界と「接地」する身体がなく、それらは意思と意図をもった「主体」ではない。しかし、AIに生成された記号列が「表現」であるかどうか、そうであるならどのような「表現」なのか、これらを考えることは表現学ならびに隣接分野において重要な課題となると思われる。

2023年を通じて、急速な AI ツールの発展・普及と同時並行的に、英語学・言語学の関連分野の研究者からはいくつかの興味深い研究や論考が示された。町田章は『AI時代に言語学の存在の意義はあるのか?』(ひつじ書房, 2023)において、LLMの基礎技術であるトランスフォーマーに、認知言語学(認知文法)におけるアテンションの概念と共通した何かがある可能性を示唆している。一方、生成文法の立場に立つノバート・ホーンステインは、「GPTの振る舞いを少し見るだけで(中略)正しい認知モデルにはならないだろうとわかる」と否定的に述べる(岩波書店『科学』12月号, 2023)。これらとは別の観点から、Tiago Torrentらは著書*Copilots for Linguists: AI, Constructions, and Frames* (Cambridge University Press, 2023)で、人間の言語能力を模倣するAIを使ってインタラクティブな対話データを得ることにより、構文文法やフレーム意味論の研究を効果的に進めていける可能性があるとして論じている。また、今井むつみ・秋田喜美著『言語の本質—ことばはどう生まれ、進化したか』(中央公論新社, 2023)ではChatGPTの高い性能に触れつつ、人間ならではの能力として、ブートストラッピング・サイクル(段階的な学習方法の洗練)とアブダクション推論(仮説形成推論)について論じている。

このように、2022年11月に公開されたChatGPTは英語学・言語学の領域でも多くの議論を呼び起こした。この波はしばらく止むことはないだろう。(同志社大学)